

山口県立山口博物館所蔵幕末維新関係資料ガイド 3

山 田 稔

**Yamaguchi Prefectural Museum Collection of Bakumatsu Ishin related Document Guide 3**

Minoru YAMADA

山口県立山口博物館研究報告

第46号(2020年3月)別刷

Reprinted from

BULLETIN OF THE YAMAGUCHI MUSEUM

No.46(March 2020)



## 山口県立山口博物館所蔵幕末維新関係資料ガイド 3

山田 稔<sup>1)</sup>

Yamaguchi Prefectural Museum Collection of Bakumatsu Ishin related materials guide 3

Minoru YAMADA

本稿は、明治150年を期に、山口県立山口博物館所蔵の幕末維新関係資料ガイドを意図して執筆したものである。前稿(『山口県立山口博物館研究報告第45号』(2019.3))に続く第3稿として、展示や出版物掲載等で利用頻度が高い資料30点を選び、図版付き解説を付した。



### 72 ガラス杯

万延元年(1860)8月～文久元年(1861)8月頃

1口

高5.0 径10.0 139-1

大村益次郎が、藩主毛利敬親から拝領したガラス製の盃。霰模様が美しい切子盃である。箱書きに「萩城製薬局所造」と記される。大村家伝来品。

---

1) 山口県立山口博物館(歴史)

## 目 次

№	資料名	制作者	年代
72	ガラス杯		万延元年(1860)8月～文久元年(1861)8月頃
73	毛利敬親・元徳父子と英国キング提督写真	ウォルター・タルボット・カー撮影	慶応2年(1866)12月30日／昭和11年(1936)11月複写
74	毛利敬親像	狩野松洲	昭和12年(1937)3月
75	毛利敬親和歌		幕末～明治初年
76	錦旗余片		慶応3年(1867)／大正6年(1917)7月
77	錦旗製作所跡写真		昭和15年(1940)頃
78	梨地菊桐沢渦紋散御櫛箱		江戸時代後期
79	討奸檄		慶応元年(1865)1月
80	大田金麗社奇兵隊奉献燈籠拓本		元治4年(1867)7月
81	鉄扇 村田清風月性相伝		江戸時代
82	久坂玄瑞・吉田松陰往復書簡		(安政6年)4月28日
83	吉田松陰詩書 贈秋良敦之助		(安政3年(1856)11月27日)
84	吉田松陰書簡 秋良敦之助宛		(安政3年)11月27日
85	吉田松陰書簡 秋良敦之助宛		(安政3年)12月13日
86	吉田松陰書簡 中村道太郎宛		(安政4年(1857)6月)21日
87	松下村塾写真		大正11年(1922)5月
88	吉田松陰先生誕生地跡之図	田総百山	昭和13年(1938)
89	木草図寄書	周布政之助、前田孫右衛門、藤野文治、中村九郎	幕末期(元治元年11月以前)
90	木戸孝允詩書		文久2年(1862)～元治元年(1864)頃
91	毛利元蕃告文		慶応元年(1865)3月
92	伊藤博文写真	内田九一撮影	明治3年(1870)／昭和8年(1933)11月複写
93	井上馨詩書		大正4年(1915)
94	山県有朋詩書		
95	松竹図	松浦松洞	幕末期
96	山口県庁写真		大正11年(1922)5月
97	山口公会堂車寄写真		昭和11年(1936)4月
98	葡萄小禽図	兼重暗香	昭和戦前期
99	近藤清石写真	金子写真館撮影	大正4年(1915)5月29日
100	近藤清石写真	麻生写真館撮影	明治42年(1909)4月
101	大内塗盆	岩本梅之進	明治21年(1888)1月

## 凡 例

- 一、記載項目は、資料名/筆者・制作者/制作年代/品質・形状/員数/法量/整理番号/解説、の順である。
- 一、法量は、原則として本紙・本体のもので、単位は、センチメートルである。
- 一、人名は、時期による名乗りの違いや変名などによる記述の煩雑を避け、一般に通用しているものを使用した。
- 一、掲載資料のうち、2015年NHK大河ドラマ特別展『花燃ゆ』、明治150年記念特別展『激動の幕末 長州藩主 毛利敬親』出品資料並びに『山口県文書館所蔵アーカイブズガイド—幕末維新編—』(山口県文書館、2010)の解説は、各図録に拠った。



### 73 毛利敬親・元徳父子と英国キング提督写真

ウォルター・タルボット・カー撮影

慶応2年(1866)12月30日／昭和11年(1936)11月防長写真館複写

1枚

13.8×9.4 830-1

慶応2年(1866)12月29日、敬親と英国海軍キング提督は三田尻(防府市)で会見した。写真は、翌日、停泊中の軍艦上で撮影されたもの。左から敬親、キング、元徳。

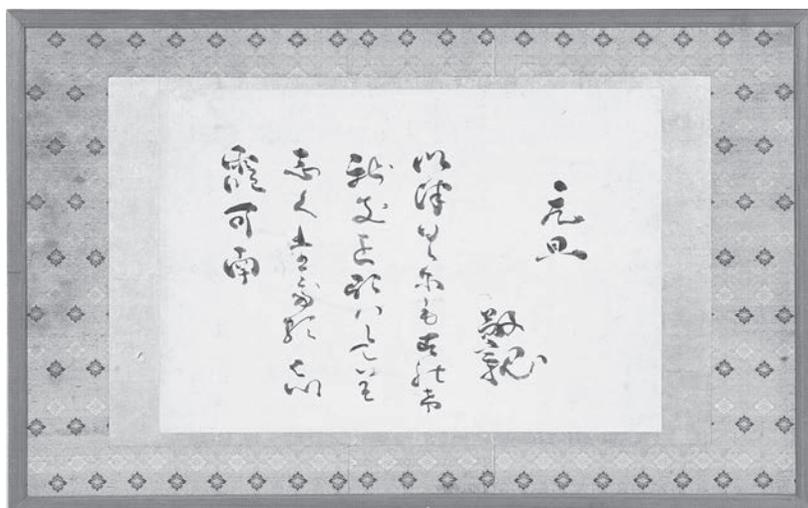
キング提督から会見の打診を受けた木戸孝允は、英国との結びつきを図る好機として会見の成功に奔走した。元徳と吉川経幹が対応する予定であったが、英国側の懇望で、敬親が急遽出席した。会見は、三田尻の貞永家で行われ、長州側から料理が振る舞われ、大判や刀、反物など多数の進物が贈られた。翌日は、英国側から軍艦上で西洋料理のフルコースで歓待されている。この饗応により、長州と英国との友好は大きく前進することとなった。なお、この会見の一件記録に「英国人三田尻渡来一件」(毛利家文庫、山口県文書館蔵)がある。



74 毛利敬親像

狩野松洲  
昭和12年(1937)3月  
絹本墨画  
1面  
56.2×42.0

他の毛利敬親像(No.3、4)と同じく、No.73の写真をもとに描かれている。毛利博物館に同じく狩野松洲の手による全身像があるが、本図はその上半身版。なお、本図と同形式の毛利元徳像(No.92)がある。



元旦  
敬親  
いつくにも 春のけし  
きを躰はして はけ  
しくたてる はつ  
霞かな

75 毛利敬親和歌

幕末～明治初年

1面

37.7×55.0 木戸79

木戸家伝来品。

## 76 錦旗余片

慶応3年(1867)/大正6年(1917)7月

1面

額151.3×47.0 余片23.7×32.4 付属絹片55.7×27.0 由来書50.0×30.7 136-1

慶応3年(1867)10月、幕府追討密勅が出されるとともに、岩倉具視より錦旗製作の内命を受け、山口町字水の上の養蚕所(後にNo.78関係の大中作右衛門宅となる)の一室で日月の錦旗2揃が製作された。

本資料は、山口県立教育博物館が、関係者の子孫から錦旗の余片と付属の絹片の寄贈を受けた際に、由来書と一緒に額装したもの。由来書の内容は下記のとおり。なお、これを簡略化したものが、『山口史蹟概覧 皇政復古七十年記念』(山口市、昭和11年)に掲載されている。また、戦前まで積極的に展示されていたものか、退色が進んでいる。

## 錦旗余片由来

慶応三年 朝議討幕ニ決スルヤ、岩倉右府ハ大久保利通品川弥二郎ヲ召シ之ヲ薩長兩藩ニ伝フルニ  
当リ囑スルニ、錦旗製作ノ事ヲ以テス、兩人欣諾シテ藩邸ニ帰り、大久保ハ直ニ大和錦及紅白緞子数  
匹ヲ購入シ品川ニ送り、携テ長州ニ帰ラシム、品川ハ広沢真臣世良修蔵等ト共ニ山口ニ帰り、藩主ニ  
謁シ討幕ノ朝旨ヲ伝達スルト共ニ、錦旗製作ノ内命ヲ言上シ許可ヲ得タリ、因テ山口石原小路諸隊集  
会所ニ於テ之ヲ製セシム、然レトモ此ノ事タルヤ当時ノ大秘密ニ属シ、諸隊集会所ノ如キ外人ノ出入  
頻繁ナル家屋ニテ裁縫スルハ漏洩ノ虞アリトシ、水ノ上養蚕局中御下リノ間ト称スル一室ヲ以テ錦旗  
製作所トシ、萩ノ人岡吉春即チ前陸軍大臣岡市之助ノ父ヲ主任トシ、約卅日間詰切り、岩倉右府秘書  
官玉松操ノ作りシ錦旗図ト大江匡房所著ノ皇旗考トヲ参照シ、日月ノ標章アル錦旗ト菊花章ヲ繡セル  
紅白ノ御旗トヲ完成セリ、同年十月十四日朝廷ヨリ薩長代表者タル大久保利通広沢真臣ヲ召サレ、討  
幕ノ密勅ヲ賜フ、此ノ時錦旗ハ実物未タ到着セサリシニ因リ、目錄ヲ以テ授与セラレタリ、明治元年  
幕軍ノ京都ニ入ラントスルヤ、伏見鳥羽ニ於テ薩長軍と衝突ス、此ノ時嘉彰親王征討大將軍トシテ出  
軍シタマヒ、山口ニ於テ製作セシ錦旗ハ始テ陣頭ニ翻リシナリ、品川作ノ俚謡中 「宮サン々々御馬ノ  
前ニヒラタ々スルノハアリヤ何ジヤ」云々はレナリ、其ノ後有栖川宮熾仁親王征東大都督ニ任セラル、  
ニ当リ、節刀ト共ニ賜ヒタルハ此ノ錦旗ナリ、初メ山口ニテ製セシ錦旗ハ二旒ニシテ、其ノ一ハ京師  
ニ奉送シ、他ノ一ハ諸隊集会所ニ出入セシ柴垣弥右衛門ノ家ニ伝ハリ、明治九年弥右衛門寡婦政ハ之  
ヲ兵部省ニ納ム、上ニ掲クル錦帛ハ錦旗裁調ノ余片ニシテ、柴垣夫妻ハ之ヲ実子園女ニ伝へ、本館ハ  
園女ヨリ譲受ケタルモノナリ





77 錦旗製作所跡写真

昭和15年(1940)頃

1枚

14.9×20.3 840-22

昭和15年(1940)頃の様子。現在、建物を含めて周辺は大きく様変わりしているが、敷地の一角に建つ石碑が史跡の位置を伝えている(右下写真)。



### 78 梨地菊桐沢渦紋散御櫛箱

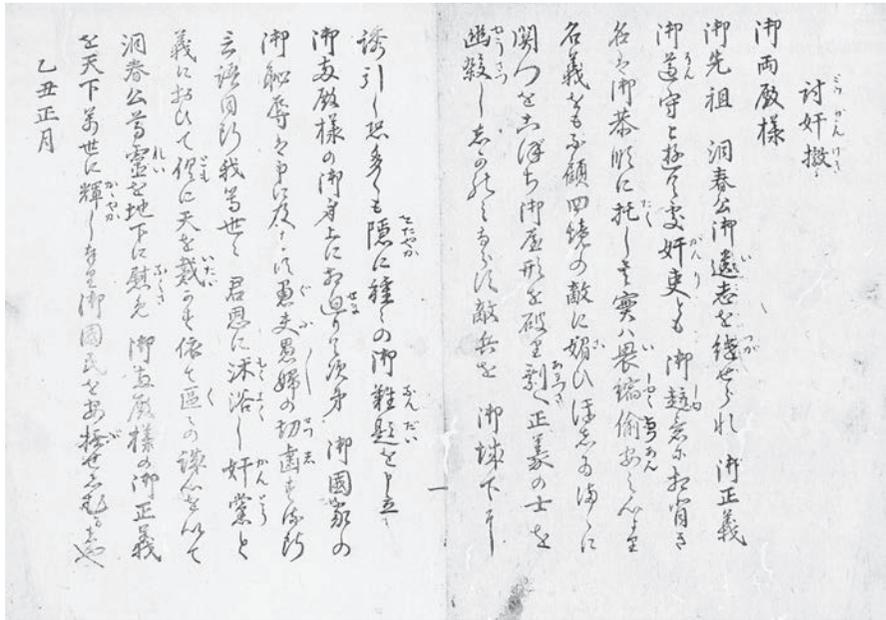
江戸時代後期

1口

18.3×15.5×15.0 360-30

明治5年(1873)8月、前年までの豊栄神社・野田御殿造営の労に対し、毛利家より旧長州藩士・おおなか大中作右衛門へ下賜されたもの。櫛箱とともに、櫛3本・文書1通が備わる。文書は、御櫛箱の下賜を伝えるもので、作右衛門の子・ひたす漸の写しである。ちなみに、No77の錦旗製作所は、一時期、大中宅となっていた。

梨地に毛利家家紋の沢渦紋と桐紋を蒔絵で配した豪華な作りで、毛利家伝来の調度品としての風格を良く示している。大名家寄贈品。



79 討奸檄

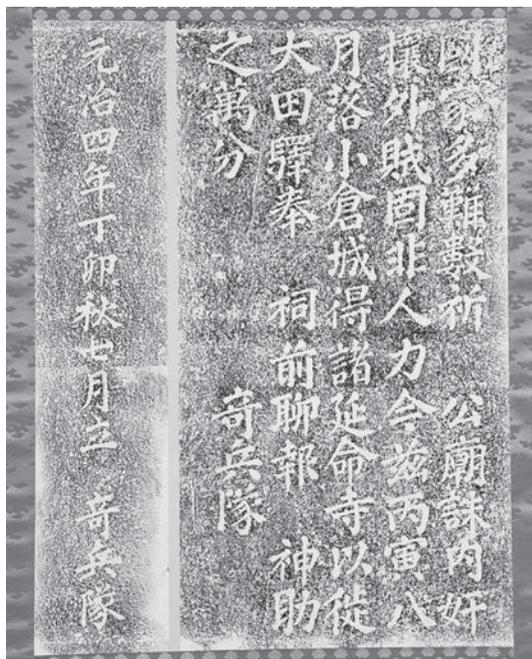
慶応元年(1865)1月

1通

23.7×33.6 521-80

慶応元年(1865)1月7日未明、諸隊が美祢郡絵堂(美祢市)の萩政府軍を襲撃し、大田・絵堂戦が始まった。本書は、諸隊が自らの正義を示すため、民衆等に配布した木版刷の檄文である。

「御両殿様の御正義を天下万世に輝かし奉り御国民を安撫せしむるもの也」と結んでいる。



80 おおだきんれいしゃ 大田金麗社奇兵隊奉獻燈籠拓本

元治4年(1867)7月

1幅

85.5×45.0 85.5×18.0 710-10

金麗社は、美祿郡大田村(美祿市)の中心部に位置し、大田・絵堂戦の際、諸隊の本陣が置かれた。鳥居手前の燈籠は、四境戦争小倉口戦の戦利品として、奇兵隊が小倉延明寺えんめいじから持ち帰り、かつての本陣・金麗社に奉納したもの。

拓本のうち、右の長文は正面向かって右側の燈籠の竿に、左の年紀は左側の竿に刻まれたもの。現在、摩耗が進み判読が難しくなっている。銘に元治4年(=慶応3年)と記されているのは、慶応=將軍徳川慶喜に応じることがないという長州勢の意思表示である。



## 81 鉄扇 村田清風月性相伝

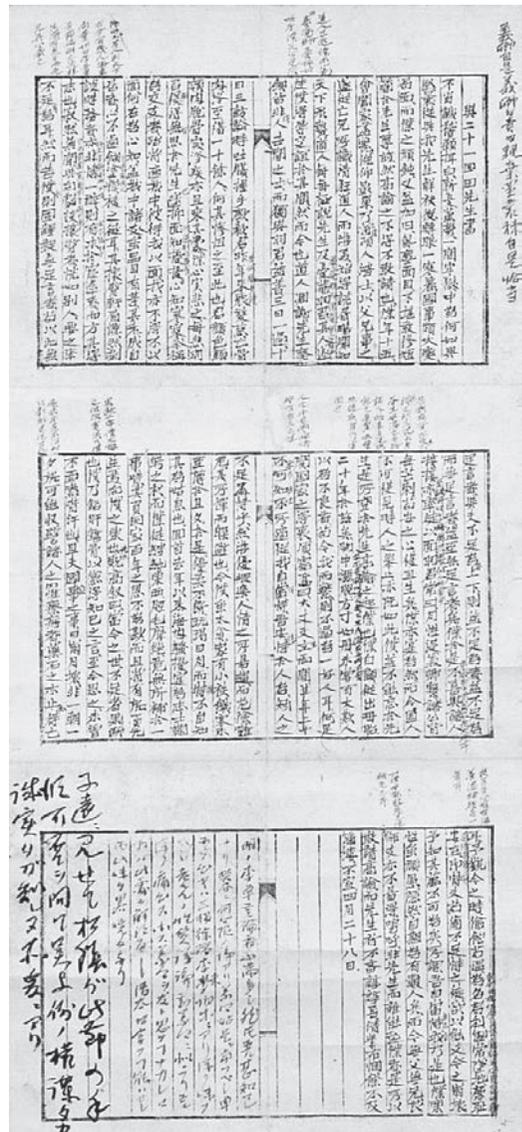
江戸時代

1 揮

長さ31.6 秋良57

村田清風から<sup>おおはなげ</sup>大島(柳井市)の勤王僧・<sup>げっしょう</sup>月性に譲られたもの。骨を黒塗りにし、朱と金で日の丸を描いた軍扇タイプの鉄扇で、明珍重定作と伝わる。

月性は、この鉄扇を笏の代わりに揮って海防法話を行ったと言われ、後に、長州藩寄組浦家家臣・<sup>よりぐみうら</sup>秋良敦之助(貞温)へ贈られた。長州藩維新関係遺墨コレクションとして知られる秋良文庫の一品。



82 久坂玄瑞書簡 吉田松陰宛

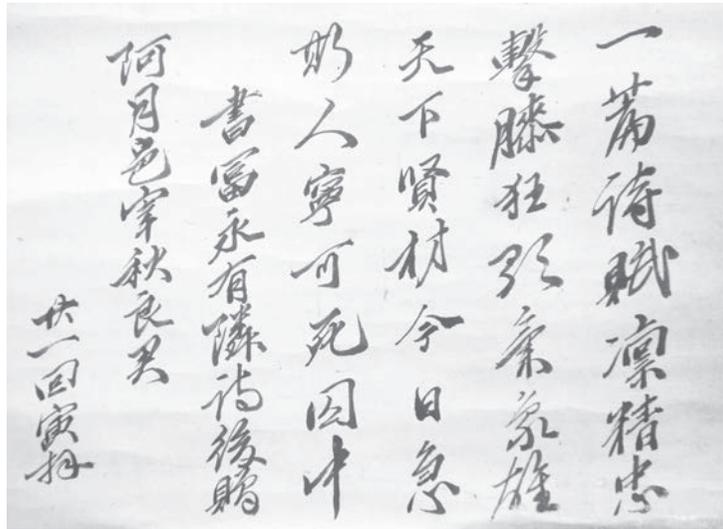
(安政6年(1859)4月28日

1幅

24.2×33.5×3紙 福本9

言論が過激化する松陰と対立した久坂が、松陰との関係修復を図り、反省や新たな決意を述べたもの。

朱書と末尾の墨書は松陰の筆である。『久坂玄瑞史料』(マツノ書店、平成30年)所収。納箱蓋裏に、福本義亮氏による「此稿一文者、玄瑞轆軻孤独悲痛心情訴于松陰先生以欲仰其教導訓育而切々伏願慕情溢于紙上使読者感涙矣、欄外朱評及後記之朱書並墨書亦松陰先生之筆也、鄭重保存可伝于後孫者也 昭和十三年戊寅仲春書 椿水狂生」の識語がある。



一篇詩賦凜精忠  
 擊膝狂歌氣象雄  
 天下賢材今日急  
 斯人寧可死囚中  
 書富永有隣詩後贈  
 阿月邑宰秋良君  
 廿一回寅揮

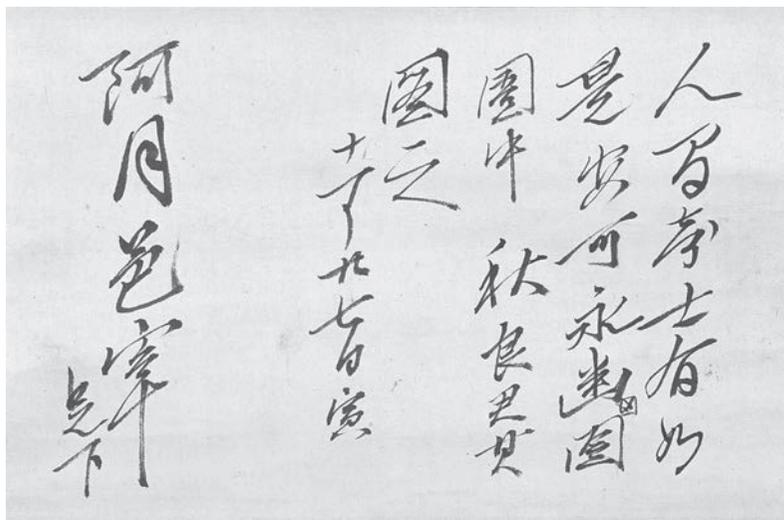
83 吉田松陰詩書 贈秋良敦之助

(安政3年(1856)11月27日)

1幅

18.5×24.8 秋良21

富永有隣の野山免獄運動に取り組んでいた松陰が、長州藩寄組浦家家臣・秋良敦之助に贈った詩。有隣のような精忠な人材を獄中に徒死させるべきではなく、一刻も早く出獄させ天下の危急に対処せねばならないと示した。「松陰詩稿」(『吉田松陰全集』第6巻所収、大和書房、昭和48年)、「安政3年11月27日付け秋良敦之助宛書簡」、「某宛書簡」(『同全集』第7巻所収、本稿No84)、福本義亮著『註訓吉田松陰詩歌集』(マツノ書店、平成2年)参照。



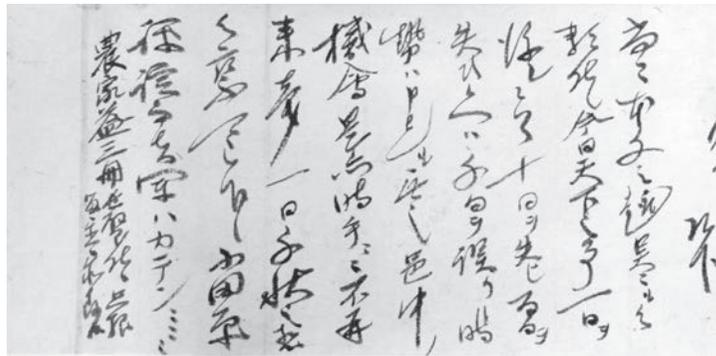
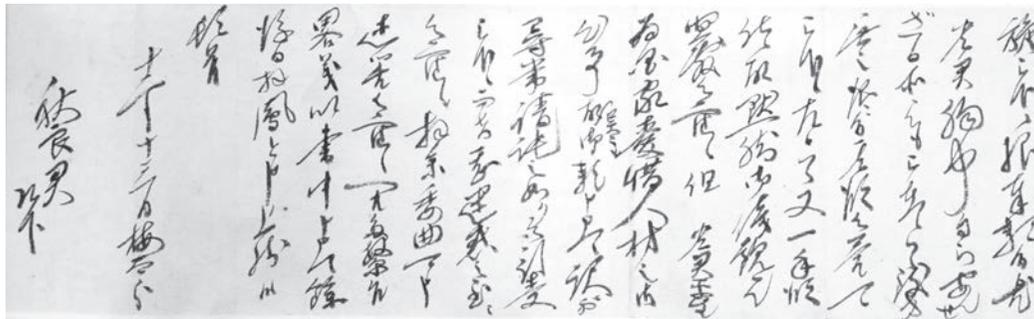
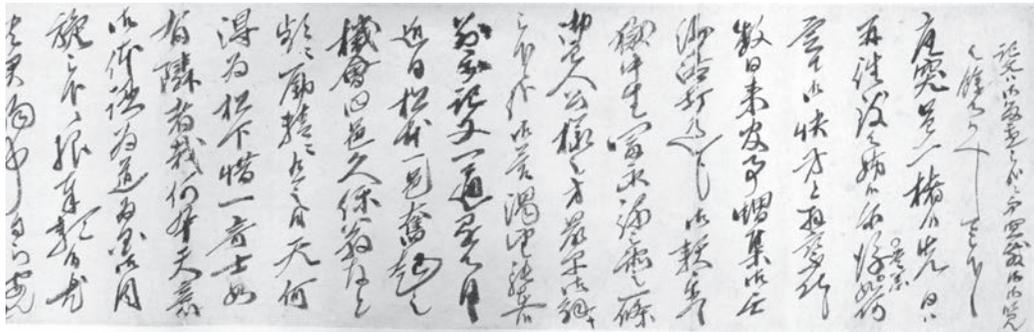
84 吉田松陰書簡 秋良敦之助宛

(安政3年(1856))11月27日

1幅

17.0×26.8 522-11

富永有隣の野山免獄運動に際しての断簡で、No.83「吉田松陰詩書 贈秋良敦之助」に付けたものであろう。『吉田松陰全集』第7巻(大和書房、昭和47年)所収。



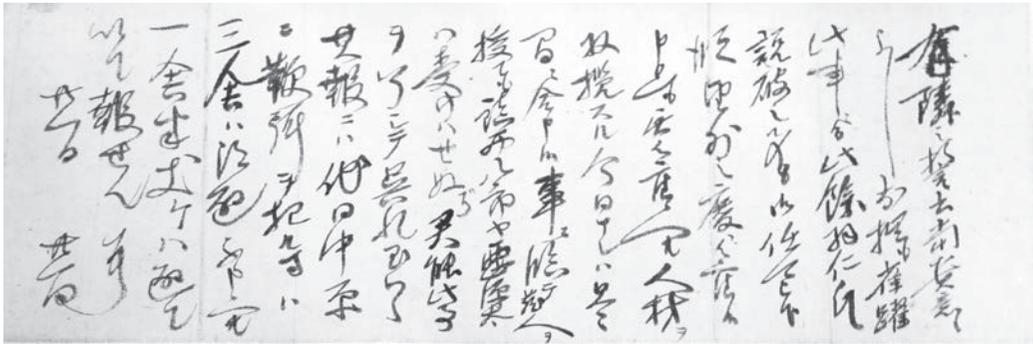
85 吉田松陰書簡 秋良敦之助宛

(安政3年)12月13日

1通

15.5×126.0 秋良2

松陰が、富永有隣の野山出獄について、秋良敦之助の主人である藩の当役・浦鞆負(元襄)の許しを得てくれるよう切望したもの。松陰は幽囚中の身を憚って、差出に兄・梅太郎の名を借りている。翌年7月、富永は松陰らの尽力により出獄し、松下村塾の師となり松陰を助けることとなる。『吉田松陰全集』第7巻(大和書房、昭和47年)所収。



86 吉田松陰書簡 中村道太郎宛

(安政4年(1857))6月21日

1通

16.7×50.3 秋良1

富永有隣の出獄に対する中村の理解と協力に対して感謝の意を示したもの。中村道太郎(九郎)は松陰の親友で、甲子殉難十一烈士の一人。『吉田松陰全集』第7卷(大和書房、昭和47年)所収。



### 87 松下村塾写真

大正11年(1922)5月

1枚

21.6×27.1 840-2

松下村塾の写真は、年紀が明らかなものでは、明治41年(1908)撮影のもの(定本版『吉田松陰全集』第4巻口絵)が最も古く、他に明治末年頃の写真(萩博物館、山口県文書館蔵)が存在する。いずれも野村靖揮毫の「松下村塾」表札(明治40年11月、当時、野村は松陰神社維持会副総裁、大正元年11月21日撤去、萩・松陰神社蔵)が掲げられている。

本写真は、大正11年に山口県立教育博物館が防長史蹟写真として撮影したもので、上記の野村表札に代わり現在も掲げられている「松下村塾」表札(松陰神社維持会会長・瀧口吉良揮毫<sup>たきぐちよしなが</sup>)のほか、「松陰神社維持会事務所」(明治39年設立、昭和22年解散)の看板がみえる。撮影年が明らかな、村塾の保存状況を伝える写真として貴重。



詩酒清狂（周布政之助）  
 庭蕨徑粟淳嫩綠隣棋入竹迷涼声  
 陸山（前田孫右衛門）  
 古稀 居易老人神梅（藤野文治）  
 竹氣芝香共清絶子如幽石更巖然  
 泉山人醉評（中村九郎）



89 木草図寄書

幕末期(元治元年11月以前)

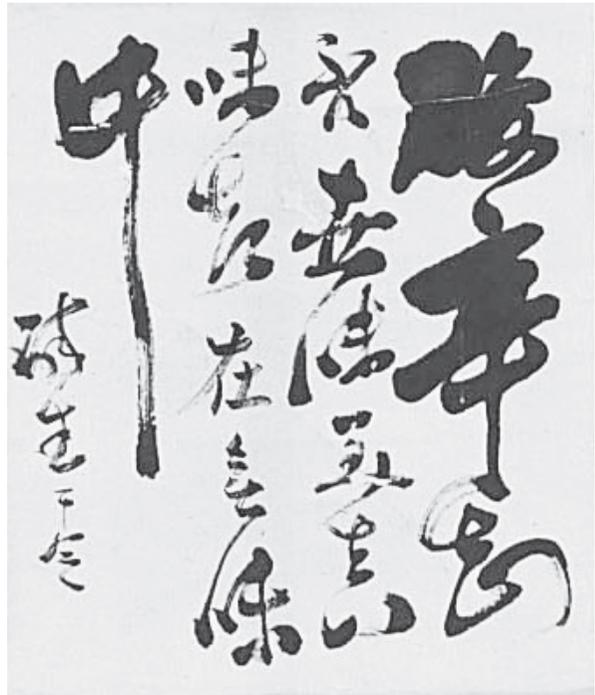
紙本墨画

1 幅

174.5×96.2 周布 1-57

周布政之助の題のもとに友人たちが書画を寄書きしたもの。藤野文治は、居易・山樵とも号し、吉田松陰の家学後見人・林百非の次子で、文雅を愛し画の才能もあったという。周布家伝来品。

酸辛知  
否世味美真  
味知在無味  
中  
醉生干令



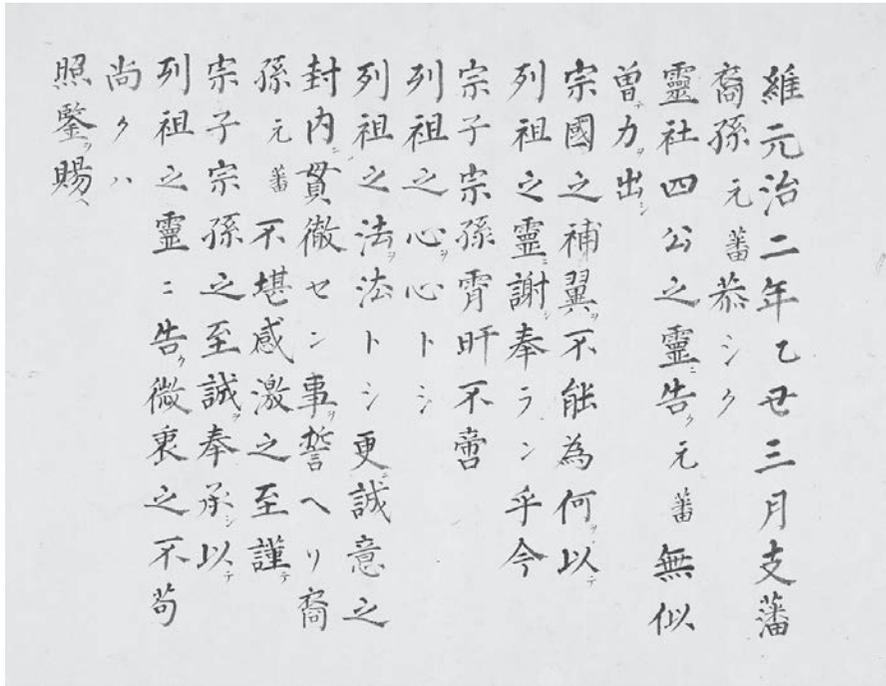
90 木戸孝允詩書

文久2年(1862)～元治元年(1864)頃

1幅

35.3×29.7 周布 1-60

木戸孝允が、酒の辛味は世の中の美しい真の味が分からないとして、酒が過ぎる周布政之助を諷めたもの。戯画で周布の酒を諷めた作品(No.22)と対幅である。「干令」は木戸の雅号。周布家伝来品。



## 91 毛利元蕃告文

慶応元年(1865)3月

1通

38.7×52.5 豊栄神社(山口県立山口博物館寄託)

慶応元年(1865)2月19日、毛利敬親は、萩城で連日大会議を開き、藩の内訌戦の責任をとって祖霊に陳謝することとした。同月22日から24日まで、萩城内の祖霊社で臨時祭が挙行され、己が不肖の身ゆえ内戦の騒動を起こした罪を詫び、今後は上下一和、藩政の革新を誓い、祖霊の神助を仰ぐ告文を神前に捧げた。長府・徳山・清末・吉川の当主も相次いで告文を捧げ、一族の結束が図られた。

本書は、徳山藩主毛利元蕃(1816～84)のもので、3月31日に奉納された。さらに、閏6月25日、吉川経幹が告文を奉納した。当館には、毛利敬親(複製、原本は野田神社保管)、毛利元周(長府)、毛利元蕃、毛利元純(清末)、吉川経幹(岩国)の告文が寄託されている。



92 伊藤博文写真

内田九一撮影

明治3年(1870)／昭和8年(1933)11月 山口・麻生写真館複写

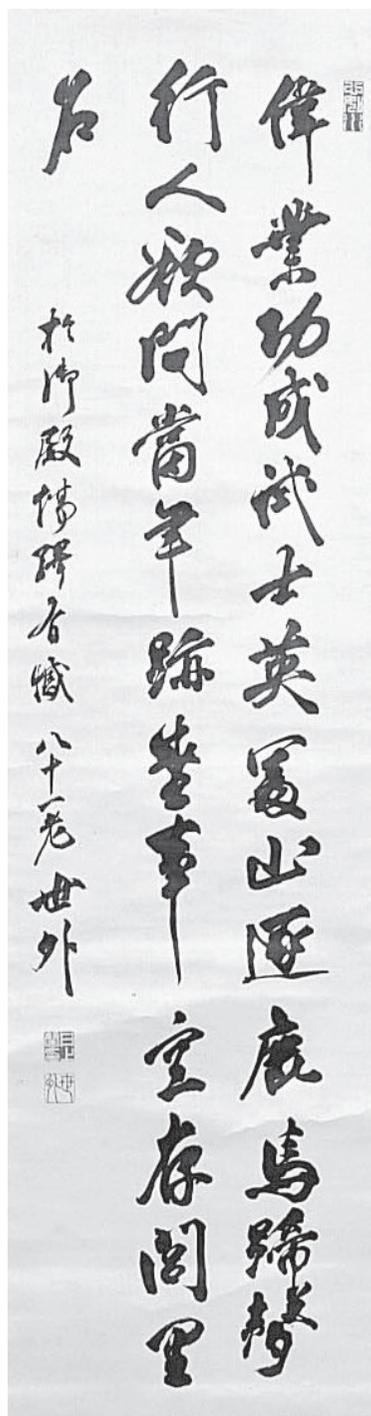
1枚

11.0×7.5 830-5

伊藤博文は、明治3年(1870)11月、財政幣制調査のため、芳川顕正・福地源一郎らと渡米。ナショナル・バンクについて学び、帰国後には伊藤の建議により、我が国最初の貨幣法である新貨条例が制定された。

この写真はアメリカ渡航前、東京浅草の内田九一の写真館で撮影された写真から、伊藤を部分複写したものか。内田撮影の写真は、展覧会図録『明治150年記念特別展 激動の幕末長州藩主毛利敬親』(山口県立美術館、2018)参照。

(印)  
 偉業功成試士英 富士逐鹿馬蹄聲  
 行人欲問當年跡 盛事空存閭里名  
 於御殿場駅有感 八十一老世外(印)(印)



93 井上馨詩書

大正4年(1915)

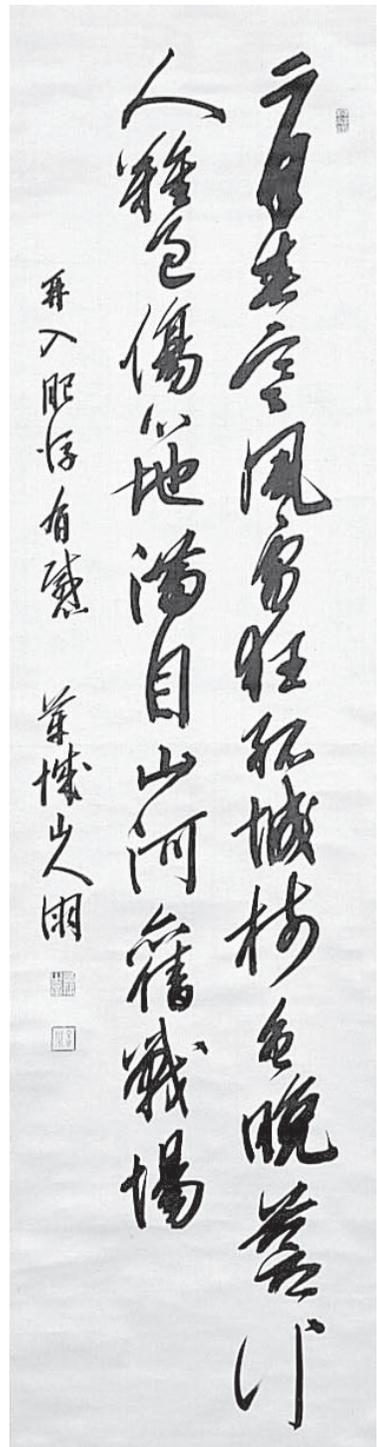
紙本墨書

1幅

131.0×36.0 周布1-73

富士山麓の御殿場宿を訪れた際に詠んだもの。没年の書となる。「世外」は井上の雅号。周布家伝来品。

(印)  
 二月春寒風雪狂 孤城樹色晚蒼々  
 行人難過傷心地 滿目山河旧戰城  
 再入肥後有感 芽城山人朋(印)(印)



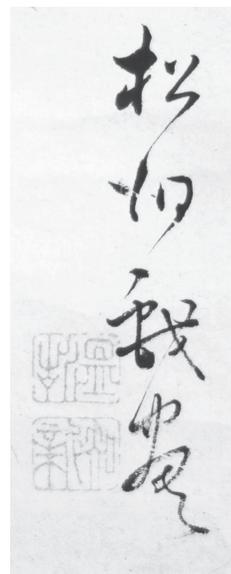
94 山県有朋詩書

紙本墨書

1幅

155.5×40.1 周布1-70

熊本を訪れた際、自身が事実上の総指揮を執った西南戦争を偲んで詠んだもの。周布家伝来品。



部分拡大

95 松竹図

松浦松洞

幕末期

紙本墨画 1幅

27.5×37.2 秋良34

松浦松洞の字「温古」と名「知新」の印を捺した墨画。この印の組み合わせによる作例は稀。秋良文庫の一品。



部分拡大

## 96 山口県庁写真

大正11年(1922)5月

1枚

21.7×27.5 840-24

山口県庁舎(大正5年完成、重要文化財「山口県旧県庁舎及び県会議事堂」、現・山口県政資料館)の堀越し、斜め正面からの写真。No88「松下村塾写真」と同じく、大正11年に山口県立教育博物館が防長史蹟写真として撮影したもの。

同庁舎は、慶応2年(1866)落成の山口御屋形(藩庁)を解体し、同所に建て替えられたもので、西洋式城郭であった御屋形時代の土塁の痕跡が残っているのがわかる。御屋形の建物・施設配置は、No33「山口御屋形図」、No61「毛利敬親山口新御屋形入居奉祝図」を参照。現在、この土盛りは撤去されている。



「山口藩庁」

## 97 山口公会堂車寄写真

昭和11年(1936)4月

1枚

11.0×15.5 850-6

慶応2年(1866)に竣工した山口御屋形(藩庁、写真右下、山口県文書館蔵)は、維新後も山口県庁舎として使用された。

その後、大正2年(1913)から始まった新庁舎建設(現・山口県政資料館、重要文化財「山口県旧庁舎及び県会議事堂」)に伴い、車寄と接続する建物一部は、県庁前の山口公会堂(大正8年竣工)に移築された。本写真は、「明治天皇行幸聖蹟写真」26枚の一つ。



「戊午拜勅会議図」

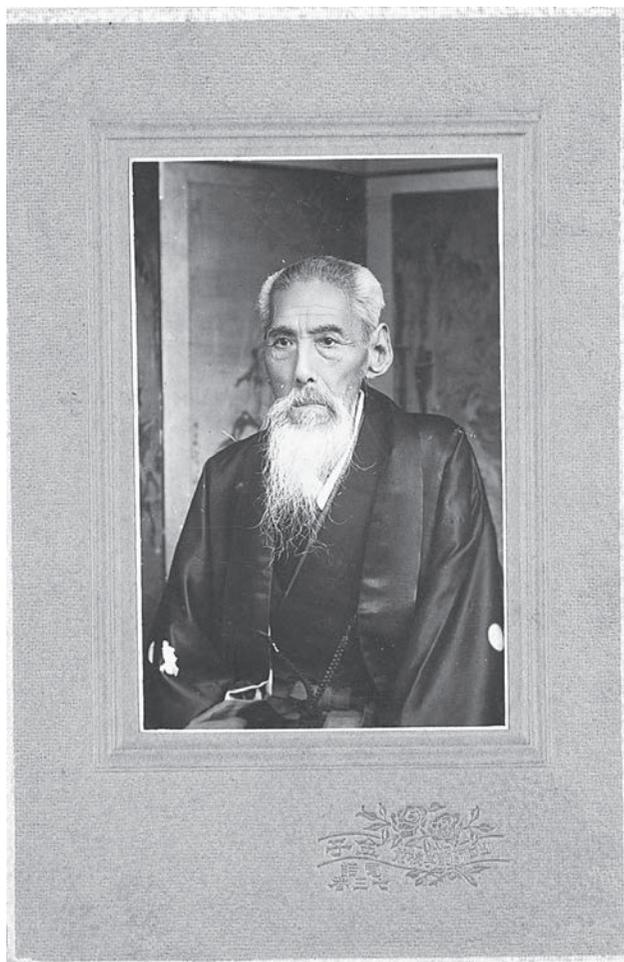
## 98 葡萄小禽図

兼重暗香  
昭和戦前期  
紙本着色  
1幅

59.5×65.6 223-11

兼重暗香(1872～1946)は、萩藩士・兼重慎一の長女として吉敷郡矢原村(山口市)に生まれた。幼時、病気のため両足の自由を失ったが、努力して東京の頌栄女学校に入学。叔父・河北道介に洋画を習い、のち本多錦吉郎に師事した。また、日本画を学び、各展覧会等にたびたび入選した。

特に洋画では肖像画、日本画では花鳥山水を得意とし、梅花・牡丹などは神業といわれた。大正時代に入り、文部省美術展覧会の特選となり、晩年には審査委員をつとめた。また、明治期に毛利家編輯所員として歴史編纂に従事した父・慎一の影響か、「前田砲台占領図」「戊午拜勅会議図」(写真右下、いずれも山口県文書館蔵)などの歴史画を残している。

99 こんどうきよし 近藤清石写真

金子写真館撮影

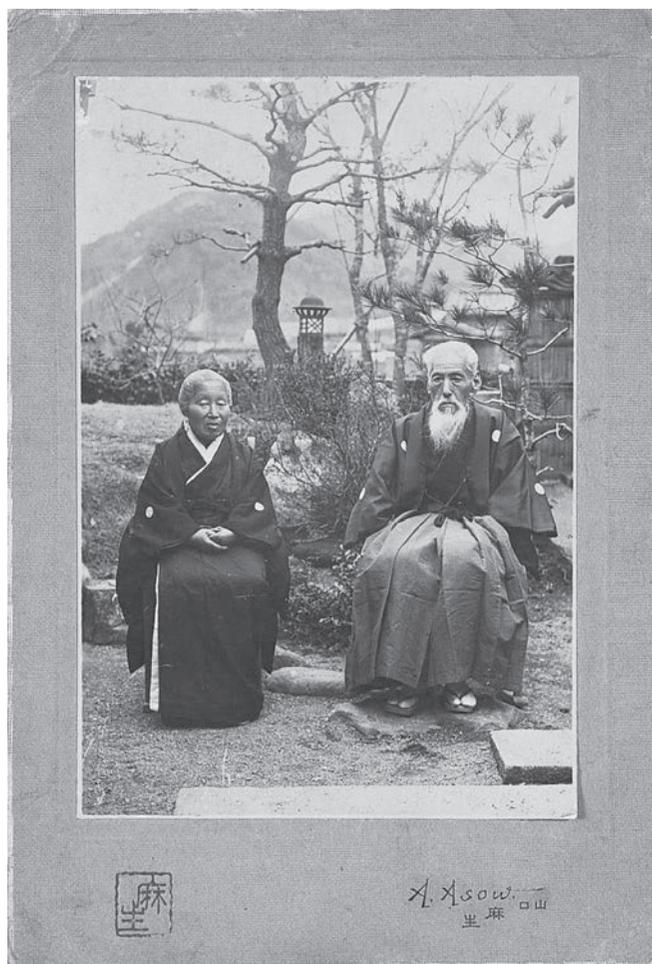
大正4年(1915)5月29日

1枚

8.7×5.7 近藤2-1

近藤清石(1833～1916)は、萩の商家大玉新右衛門の子に生まれ、のち長州藩一代遠近付近藤家を継いだ。維新後は、県庁で地誌掛や旧記編纂掛などを勤めたほか、玉祖神社宮司、山口県下神道事務分局長に就任するなど神道活動にも従事した。近藤は、和学・漢学・古典有識に精通し、歌道に長じ、古書画古器物の分野にも一見識を有するなど幅広い視野と学識を兼ね備えた人物で、生涯に著した書は1,614巻にもおよび、代表的著作「大内氏実録」「山口県風土誌」は現在でも貴重な研究書として役立てられている。

本写真は、最晩年のもの。なお、近藤の著作類は「近藤清石文庫」(578点、山口県文書館蔵)、復興大内塗などの遺品類は「近藤清石資料」(37点、当館蔵)として保存活用が図られている。また、近藤清石の展示図録に『山口県地方史研究の先駆者 近藤清石』(平成4年、当館発行)がある。



100 近藤清石写真

麻生写真館撮影

明治42年(1909)4月

1枚

13.6×9.2 近藤2-2

明治42年(1909)4月、近藤清石の門人ら405名が賛同して、近藤夫妻の長寿祭が山口・今八幡宮で執行された。翌日、107名が参列して祝賀会が行われた。本写真は、その際に会場となった山口・葉香亭で撮影されたものか。清石の左が妻・よね。



「鷹雲捉風－大内氏工芸考土代－」

## 101 大内塗盆

岩本梅之進

明治21年(1888)1月

5枚1組

各36.2×36.2×3.8 近藤27

近藤清石の特筆すべき業績の一つに、大内塗の復興がある。明治18年(1855)、近藤は明治天皇の山口県御巡幸御用掛として古器物天覧の準備を進めていた際、毛利家の所蔵品の中に「大内碗」(漆絵枝菊碗、県指定有形文化財、毛利博物館蔵)を発見したことを契機に、大内塗の復興に尽力した。近藤はこの大内碗や町で見つけた秋草に雲形菱紋の鏡板を手本にして、山口の鞘師岩本梅之進に命じて大内時代の漆器模造に取り組ませた。

本作品の図柄は、「<sup>かくらんそくふう</sup>鷹雲捉風－大内氏工芸考土代－」(近藤清石文庫100(2)の2)、山口県文書館蔵)に示されており、外箱の表書きに「雪舟盆」、箱蓋裏に「明治廿一年一月漆工岩本製作 霜堤居常住」(霜堤居常住=近藤)と記される。明治復興期の大内塗盆(膳)の品質を示す貴重な資料である。